

シギズムンド・クルジジャンノフスキイ
Сигизмунд Кржижановский

秋草俊一郎 [訳]
Сюнъитиро Акикуса

クヴァドラトウリン Квадратурин

ク
ヴ
ア
ド
ラ
ト
ウ
リ
ン

外からそつとドアをたたく音がした。コツン、とまず一度。間。そして再び——すこし大きめにゴツンと、二度目。

ストウリンはベッドから身を起こさずに、慣れたしぐさで足をノックがした方に伸ばすとノブにつま先をかけて引つぽつた。思い切りよくドアが開いた。戸口に立っていたのは、頭がほとんどドア枠に触れるほど上背がある、窓に滲む夕暮のような薄墨色をした男だった。

ストウリンが足をベッドからおろすより先に、客は室内に歩を進め、さつとドアをドア枠に戻すと、猿のような長い腕にぶらさげた書類鞆で、まず右側、次いでもう一方の壁を突いた。

「まさにマツチ箱ですな」

「なんだって？」

「この部屋ですよ。マツチ箱。ここの広さは？」

「八平方アルシンとすこしかな」

「それです。ちよつといいですか？」

* 約四平方メートル。一アルシンは約七〇センチ。

ストウリンが口を開く間もなく、客はベッドの端に腰かけ、ぱんぱんにふくらんだ書類鞆の留め金をさつと外した。そしてほとんどささやくように声を潜めて続けた。

「耳よりな話がございました。私が、つまり私どもが手がけております、まあいわば、実験ですね。今はまだ内々の話なんです。外国の有名企業もかわつてましてね。電気のスイッチを入れたい？ いや、それにはおよびません。すぐ済みますから。つまりですね、発見されたんですよ——この発見はまだ秘密なんです——部屋を拡張する薬が。はい、これがそうなんです」

見知らぬ男の手は書類鞆から引き抜かれると、ストウリンにくすんだ色合いの細長いチューブを差しだしていた。普通の、絵の具のチューブのようだったが、キャップが嚴重に締められ、鉛で封がされていた。ストウリンは遂方に暮れて、つるつるしたチューブを指の中でひねくりまわしていたが、部屋はほとんど真つ暗だったのに、ラベルにくつきり印字された文字は判読できた。「クヴァドラトウリン」。視線をあげると、まばたきもせずじつと見つめる相手の視線にぶつかった。

「どうですか。いくらかって？ とんでもない。無料グラテイスですよ。宣伝ですね。ただし、この」

客は同じ書類鞆から帳面を引き出し、ぺらぺらとめくつた。「感謝帳にサインだけもらいますよ。うか（まあ、簡単な謝意の表明みたいなものです）。鉛筆？ はい鉛筆。どこかって？ ここです。Ⅲの欄。これでよし」

サイン帳をパタンと閉じると、客は姿勢を正し、くるりと背を向けてドアに歩み寄つた——しばらくしてストウリンはスイッチを入れ、くつきりと浮かびあがつた「クヴァドラトウリン」とい

う文字を、眉を上げ半信半疑でしげしげ眺めた。

注意深く観察してみると、その亜鉛のパッケージは（よくメーカーが特許物にするように）半透明の薄紙にびったりくるまれ、紙の端と端はたくみに張り合わせてあった。ストウリンはクヴァドラトゥリンの紙の覆いをとると、半透明のつやの向こうからのぞいていた、チューブにそって丸まった文章を広げて読みはじめた。

使用法

小さじ一杯のクヴァドラトゥリンエキスを、コップ一杯の水に溶かします。脱脂綿か、または清潔な布に溶液をしみこませます。拡張を予定している部屋の内壁に塗ってください。成分がしみになることはなく、壁紙を損なうこともありません。加えて、南京虫を駆除する作用もあります。

これを読むまで、ストウリンは疑っていた。今、疑念は別の気持ちに——ざわつくような、かきたてられるような感覚に変わろうとしていた。立ちあがって檻のような部屋の隅から隅へと歩こうとしてみたが、あまりに距離が短すぎた。部屋の散歩はほとんどターンの連続みたいなものだった。つま先から踵、今度はその逆を繰り返す。そしてストウリンはくるつとふり返り、座って目を閉じ、想念に身をゆだねた。こんな具合に始まるような——なんだ……？　もし……？　突然

……?——左手側、耳から一アルシンの距離で、だれかが壁に鉄くぎを打ちこんでいる。しょつちゆう釘からそれががん音をたてるその金槌は、まるでストウリンの頭をめがけて打ちこまれているようだった。こめかみを両手で押さえつけて目を開けた。黒いチューブが、壁と窓枠とベッドの合間にやつとのおさまっている小机の真ん中に置かれている。ストウリンが鉛封を破ると、チューブの蓋がねじのように回って落ちた。鼻をつく、わずかに苦みさえ感じさせるような刺激臭が、開いた丸い穴から漂ってきた。匂いは快く鼻孔を刺激した。

「うん、うん、ためしてみるか。なにはともあれ」

上着を脱いで、クヴァドラトウリンの持ち主は実験にとりかかった。椅子はドアに寄せ、ベッドは部屋の真ん中に。ベッドの上に机をのせた。ほんのり黄を帯びて光っている透明な液体を受け皿に入れて床に置き、それをうしるから押すようにして這っていきながら、鉛筆に巻きつけたハンカチをクヴァドラトウリンにひたしては、床板と壁紙の模様にとって丁寧に塗っていった。今日言われたように、部屋はマツチ箱そのものだ。だがストウリンはゆっくり几帳面に仕事し、隅っこも塗り残しがないようにした。これはかなり骨だった。というのも、液体は実際すぐに気化するか、しみこんでしまうかしたから（そのどちらなのかは判別できなかった）。塗った跡にはなにも残らなかった。鼻をつく刺激臭だけが残って一層強まり、頭をくらくらさせ、指をもつれさせ、床についた膝をわななかせた。床板と壁の低い部分が終わったとき、ストウリンは奇妙に萎えて重くなった足をあげ、立って作業を続けた。ときたまエキスをつぎ足さなくてはならなかった。チューブは少

しずつ空になっていった。窓の外はもう夜だ。右側の共用台所ではかんぬきがかけられる音がした。アパートは眠りに備えはじめた。音をたてないように留意して、残ったエキスを手にした実験者は、ベッドにそろそろとのぼると、そこからグラグラする机に足をかけ……。クヴァドラトゥリシ化しなくてはいけない残りは天井だけだ。だが、その時壁が拳でたたかれた。

「そこでなにしてるんだ。みんなもう寝てるぞ……」

音がしたほうをふり返ろうとして、ストゥリンはへまをした。つるつるしたチューブは手から飛びだして落下した。すっかり乾いてしまったブラシをもって、ストゥリンは用心深くバランスをとりつつ床に降りた。だが、すでに遅かった。落つこちたチューブは空っぽで、そのまわりにはあつという間にひからびていく、みが、くらくらするような香りを放っていた。疲れはてて壁に手をつきながらも（左ではふたたび不満げに寝返りをうつ気配がした）、彼は最後の力をふりしぼって物を元の場所に戻し、服を着たままベッドに倒れこんだ。黒い眠りがすぐに彼の上に覆い被さってきた——チューブも人間も空っぽだ。

2

二つの声がひそひそ話を始めた。それから音量が次第にピアノからメゾフォルテに、メゾフォル

テからフォルテに、そしてフォルティッシモになつて——ストウリンの眠りをやぶつた。

「お話にもなりやしない。あの住人をスカートのなかから追いだすのに……。大声でわめけつての
かい!?」

「ごみじゃあるまいしそう捨てらんないわよ」

「知つたこつちやない。ちゃんとう言つておいたじゃないか。犬も、猫も、ひも、だめだつて」——このあと、ストウリンをとうとう眠りからたたきだしたものすごいフォルティッシモが続いたのでした。まぶたは疲労でぴたりと縫い合わされて開かない。慣れたしぐさで手を伸ばす——時計が置いてある机の端へと。始まりはこんな具合だつた——しばらくの間、腕を伸ばしていたが、空気をまさぐるだけ。時計も机もない。ストウリンは即座に目を開けた。そしてすぐベッドに体を起こすと、茫然として部屋を眺めた。いつもはここ、枕元にある机は、部屋の真ん中へ移動していた——だだっぴろいが、不格好で、見覚えがない部屋の真ん中へと。

物はみな元のままだつた。机を追つてこちら側に這い込んできた、使い古しの丈の短いカーペット、写真、背もたれのない椅子、壁紙の黄色い模様——だが、どれもみな妙にまのびした立方体の部屋の中に、慣れない様子で散らばつていた。

クヴァドラトウリン——ストウリンは思ひいたつた——これがその力か。

すぐに、新しい空間に家具を合せてみた。だが、どこかしつくりこない。丈の足りないカーペットをベッドの脚の側に寄せてみたが、ぼろぼろの床板がむきだしになつてしまふ。机と椅子を

いつもどおり枕元に寄せると、蜘蛛の巣がはった、がらんとした部屋の隅が空いて、いろいろとぼろがあらわになってしまっていた——以前はせまい部屋の隅と机の影になっていたおかげで上手く隠れていたのに。ストウリンは勝ち誇った、だがいささかおびえた笑みを浮かべて自分の新しい、ほとんど平方された平積クワドラトゥーアの細部を入念にチェックしたのだが、部屋が均等に広がっていないことに気づいて不満を覚えた。出隅は角度が鈍くなり、壁が斜めに傾いでいた。つまり、入隅ではクヴァドラトゥリンの働きが見るからに弱くなっていたのだ。あれだけストウリンが入念に塗布したのに、実験はいくぶん不均一な結果に終わった。

アパートがじよじよに目覚めだした。ドアの側を住人が行ったり来たりしている。共有洗面所のドアがばたんばたと音をたてている。ストウリンは部屋の入り口に近づいて鍵を右に回した。それから、手を後ろ手に組んで端から端まで歩いてみることにした。悪くない。喜びで思わず笑みがこぼれた。ついにやったぞ。だが、すぐこう考えた。左右、後方の壁越しに、足音が聞こえるかもしれない。一時、身じろぎをやめて立ちすくむと、さっとかがみこんだ——突然こめかみで、夕べ味わった鋭い刺すような痛みがかすかにうずきだしたのだ。編み上げ靴を脱ぎ、靴下だけになると、音をたてずに歩いて散歩の悦楽に没頭した。

「入ってもいい？」

女家主の声がした。ドアに近づいて鍵に手をかけようとしたが、すぐに思いなおした。開けてはだめだ。

「着替え中です。ちょっと待ってください。すぐ出ます」

『いまのところうまくいってる。だが面倒だな。鍵をかけて持ち歩くことにしよう。だけど鍵穴はどうする？ 窓もあるしな。カーテンが必要だ。今日のうちに——』こめかみの痛みはさらに鋭く、しつこくまとわりついていた。ストウリンは急いで書類をかき集めた。仕事の時間だ。服を着て、頭痛を帽子に押しこんだ。ドアのそばで聞き耳をたてた。誰もいないみたいだ。さっと開けて、さっと出た。すぐ鍵をかけた。よし。

女家主は玄関で辛抱強く待っていた。

「あの女のことです話をしたいんですがね。名前がでてこないけど。あの女が申し込みを住宅管理委員に出したってさ……」

「聞いてますよ。続けてください……」

「あなたには関係ない話だけだね。八平方アルシンじゃ減らしようがない。だけど、あたしの身にもなってみて……」

「急いでるので」——目深にかぶった帽子でうなずき、階段を下りた。

仕事の帰り道、ストウリンは家具屋のショーウィンドーの前で立ち止まった。ソファアが描くゆつたりとした曲線、繰り出し式の丸テーブル。すばらしいだろうな。だけど、どうやって視線と質問をかいくぐって持ち帰ればいいんだろう——みんなあれこれ勘ぐるだろう、勘ぐらずにはいられない……。

カナリア色の生地を一メートル分買うにとどめなくてはならなかった（とにかくカーテンだ）。食堂には寄らなかつた。食欲は消え失せていた。急いで部屋にもどらなくては——そのほうが気が楽だ。急がずじつくり考えて、周囲を見回して、あれこれ調整してみよう。部屋のドアに鍵を差しこんだまま、ストウリンはだれか見ていないかあたりを見回した。誰もものぞいていない。部屋に入る。明かりをつけた彼は、長いこと立ちすくんでしまった。両手を壁に伸ばしてはみたが、心臓は激しく脈打っていた。こんなのは、けっして予想しなかつたぞ。

クヴァド、ラトウリンは作用し続けていた。主人が外出していた八、九時間の間に、四方の壁はゆうに一サージェン*は伸びていた。一步踏み入れたとたん、目に見えないつつかえ棒で伸ばしたよう

*一サージェンは約二・一メートル。

な床板が、オルガンのパイプのような音をたてた。伸びて不自然にゆがめられた部屋全体が、ストウリンを脅かし、苦しめ始めていた。上着も脱がずにストウリンは椅子に腰かけ、広々とほしているが、押しつぶされ棺桶状になった、居住用の箱とでもいべきものを眺めながら、どうして望まぬ結果になったのか理解しようとした。思い出したのは、天井は塗らなかつたことだつた。エキスが足りなかつたのだ。箱型住居は横と縦に伸びただけで、上方向には一インチたりとも伸びなかつたのだ。

『こいつめ、止まるんだ。このクヴァードラトウリンのやつを止めないと。でないとおれは……』こめかみを手のひらで押しつけてみた——すると、今朝から頭蓋の裏側に入りこんだ蝕むような痛みが、ガリガリと執拗にドリルを回す音が聞こえてきた。向かいの家の窓明かりは消えていたが、ストウリンは黄色のカーテンで部屋を隠した。頭の痛みは一向におさまらない。静かに服を脱ぐと、明かりを落として横になった。はじめは短い眠りが訪れたが、その後でなにか、不快な感覚に起こされた。布団にびったりとくるまう一度眠りに落ちたが、またあの不快なよるべなさが眠りをさまたげた。片手をつけて体を起こすと、自由な手で周囲を調べた。壁がない。マッチを擦つた。ううむ。火を吹き消した。肘がきしむほど強く両手でひざをかかえこんだ。『まだ大きくなる。くそつ、まだ大きくなる』歯を食いしばつてストウリンはベッドから這いだすと、物音をたてぬよう、用心深く、はじめは前方の、次いで後方のベッドの脚を遠ざかつていく壁に引きよせた。軽い悪寒。これ以上火をつけるのはやめて、くるまって暖をとろうとフックにかけたコート

をとりにも隅に行つた。だが、昨日あつた壁の位置にはフックはなく、手が毛皮に触れるまで数秒のあいだ壁を探らなくてはならなかつた。こめかみの痛みのようにだらだらとまとわりついてくる長い夜の間、さらに二度、ストゥリンは壁に頭と膝を押し当てて眠りに落ち、そして目を覚ますと、ふたたびベッドの脚を動かした。この作業を機械的に、たんたんと、生氣なく繰り返しながら、まだ周囲は暗いのに、必死で目を閉じまいとした。このほうがまだましだ。

4

次の夕暮れ時が近づき、その日の仕事を終えたストゥリンは自室のドアに歩みよつて、足どりも早めずに踏みこんだが、もう驚きも恐怖も感じなかつた。低く長い天井のどこか遠くに、一六燭光のぼんやりした明かりがかすかにもつたが、黄色い光は、巨大で生氣がない、虚ろなあばら屋——このあいだクヴァドラトゥリンを塗るまではたしかに狭かつたが、あんなに住み心地がよく、こぢんまりして温かかつたわが家——の、ぼらばらに遠ざかつていく隅までは届かなかつた。遠近法に則して縮まつた窓の黄色い四角形に向かつておとなしく歩いて、歩数を数えようとした。そこから——窓ぎわの隅に哀れにももぐりこんだ臆病なベッドから、疲れきつてぼんやりと部屋を眺めたが、抉りこむような痛みを覚えながら、床板にはりついた影のゆらぎと、低くなめらか

に垂れさがった天井を見た。『チューブからしぼり出したやつが、平方クワッドラットしているんだ。平方の平方。平方の平方の平方。なんとかしてうまく策で出し抜かないと。出し抜けなければ、あつちがこちらを抜きさってますます育って……』そして、突然ドアがどんとたたかれた。

「ストウリンさん、いますか？」

同じく遠方から、低く、かろうじて聞きとれる女家主の声が響いた。

「いますよ。寝てるんでしょう」

全身から汗が噴きだしてきた。『間に合わなかったら——やつらが先に……』そして、音をたてないように注意して（自分が眠っていると思わせなくては）、暗がりの中、長い時間をかけてドアに歩みよっていった。やつと着いた。

「だれですか？」

「開けてください。なんだって鍵をかけてるんです？ 再測量委員会ですよ。測り直したら出ていきますから」

ストウリンはドアに耳を押し当てて立っていた。薄い板一枚隔てて、重いブーツがどたと踏みならされた。なにかの数字と部屋の番号が呼ばれた。

「次はここだ。開けてください」

片手でストウリンは電気のプラグの頭をつかみ、鶏の頭をひねるようにしてなんとかよじきろうとした。プラグの頭はバチッと光つてはざれると、力なく回転してぶら下がった。再度、ドアを拳

でたたく音。

「ほら、早く」

ついにストゥリンは鍵を左にひねった。ドア枠に黒くがっしりした人影が戸口から進みでた。

「明かりをつけてください」

「きれてしまってるんです」

左手でドアノブをつかみ、右手で電気のコードをつかんで、ストゥリンは背後のあとずさつていく空間を覆い隠そうとした。黒い人影が一步下がった。

「マツチを持ってないか？ その箱をこつちに。やっぱり見てみよう。きまりだから」

突然、女家主が不満の声をあげて泣きだした。

「その部屋のなにを見るっていうのよ。八平方アルシンを八回ずつチェックしてさ。何度測ったって増えやしないよ。その人はおとなしい人で、仕事帰りで横になつてたんだから。休ませもしないってのかい。測って測って測り直してさ。それにひきかえ、居住する権利すらない人間もいるってのに……」

「まったくだ」黒い人影たちはぶつぶつ言い、片方のブーツからもう片方へと体を揺らし、そつと、ほとんどなでるような動作でドアを明るい方に引いていった。一人残されたストゥリンは、綿のように疲れてふらつく足で、毎秒ごとに四方に広がり、育ちつづける四角い闇のただ中に立ちつくしていた。

足音が静まるのを待って、ストウリンはすばやく上着をはおって外に出た。測り直しや測り忘れ、なんやかやで奴らがまた来るかもしれない。交差点から交差点へと歩を進めながらのほうが、まだなにか考えがうかぶだろう。夜が近づくにつれ風が強まった。風は木々の、凍える裸の枝たちをぶるぶる震わせ、影たちをよろめかせ、電線をぶんぶん揺らし、たたき壊そうとするかのように壁をうった。なぐりつける風から、こめかみの鋭くなつていく痛みを隠して、ストウリンは影に潜りこんだり、街灯の光に体を浸したりしながら歩いた。突然なにかが、荒々しくうちつける風をくぐり抜けて、肘にそつと、やさしく触れてきた。ふり向いた。黒い帽子のへりをばたばたとうつ羽の下から、誘うように目を細めている、見知った顔。うなりをあげる空気のなかで、声がかろうじて届いた。

「私だつてわかつてたくせに。どこを見てるのよ？ 会釈ぐらいしなさいよ。ほら」

風でのけぞりつつも、女の軽い身体は、くいこむような尖った踵で立ち、全身で不服従と戦闘の意を示していた。

ストウリンは帽子のひさしを下にかたむけた。

「どこかに行つてしまはずだつたんじゃないか。それともまだここにいるつもり？ ということ

は、なにか具合が悪いことでも……」

「そう。まさに、そうだ」

スエードの指がこちらの胸に触れるのを感じたが、すぐにマフのなかに引っこんだ。帽子の踊るような黒い羽の下に、細められた瞳を探りあてた。もう一目この女を見れば、もう一度触れたり触れられたりすれば、焼けつくようなこめかみにもう一撃もらえば、考えも吹っ切れて、風に吹かれてなくなってしまうだろう。一方、女は顔を寄せ、こう口にした。

「あなたのところに行きましょう。この前みたいになさ。覚えてるでしょ？」

すぐさま、すべてが台無しになった。

「うちはだめだ」

女は男が引っこめた腕を探りだすと、スエードの指をからませてきた。

「うちは……よくないんだ——彼はふたたび手を引っこめ、目をそらしてそっぽを向いてうなだれた。

「せまいつて言いたいんでしょ。そんなのおかしいわ。せまければせまいほど……」

風が言葉じりをさえぎった。ストウリンは答えなかった。「それとももしかして……ないのかしら……」

角までたどりついて、ふり返ってみた。女は立ち続けていた。盾のようにマフを胸のところで握りしめ、薄い肩は寒さで震えている。風はスカートを破廉恥にもはためかせ、コート裾をまくり

あげていた。「明日だ。全部明日にしよう。だけど今は……」ストゥリンはきつぱりと背を向け足どりを速めた。

『みんな寝ている今のうちだ。どうしても必要なものだけ持って出て行こう。逃げるんだ。ドアを開けはなして、あとのことはまかせよう。なんでおれだけが？ まかせよう』

実際、アパートはまどろみ、薄暗くなっていた。廊下をまっすぐいって右に折れ、ストゥリンは決然とドアを開け、いつものように入り口にあるスイッチをまわそうとしたが、指の間でそれは力なく空回りして、電気をきつたことを思い出させた。いまいましい障害だ。どうしようもない。ポケットをまさぐって、マツチ箱をさぐりだした。中身はほとんどない——つまり、三、四回あたりを照らしておしまい。明かりと時間を節約しなくては。ハンガーの所に行き、最初のマツチをすつた。明かりが黄色い半径を伸ばして黒い虚空を這いひろがった。誘惑にうち勝ちながらストゥリンは、照らされた壁の断片とフックに掛かった上着と軍服に意識を集中させた。自分の背後には、薄暗い隅を四方にどンドン広げていくクヴァドラトゥリンを塗られた死の空間があることはわかっていた。わかっていたので見なかった。左手でマツチがくすぶるなか、右手でフックから服をむしりとり、床にほうり投げた。もう一本マツチが要る。床を見ながら部屋の角に向かう。もしそれがまだ角と呼べるようなもので、まだそこにあるとすればの話だが——彼の計算では、そちらにベッドが引っぱり出されているはずだった。だが、うっかり火に息がかかってしまった——ふたたび、黒い砂漠が隙間なく閉じあわされた。残ったのは最後の一本だけ。彼はそれを一、二度

すつてみた。火はつかなかった。もう一度——すられたマッチの頭が、ポキリともげて指をすべり抜けてしまった。ふり返つて、これ以上奥に入りこむのが怖くなり、フックの下に投げた服のかたまりの方に動いてみた。だが方向転換は不正確だったようだ。指先を前方に伸ばして、彼は歩いた——一足、また一足。一足、また一足。だが、なにも見つけられなかった。服も、フックも、壁もなにも。『もう着くはずだ。着かなきゃおかしい』全身に寒気と汗がじっとりはりついていて、足が妙な具合にたわんできた。ひざを落とし、手のひらを床についた。『帰らなければよかった。正直、一人ではもう無理だ』突然、ある考えが襲ってきた。『こうしてるあいだもどんどん広がっていくんだ。こうしてるあいだにも……』

市民ストウリンの八平方アルシンに隣接する クワッドラットウーラ 平積の住人たちには、その叫び声の音色と抑揚がなにを意味するのか、恐怖と眠気が入り交じった状態では判然としなかった——自分たちを真夜中にたたき起こし、部屋の入口まで詰めかけさせたその声の意味が。砂漠で迷って死につつある男が、寂寥とした空間で叫んだところで、時すでに遅く無駄なことだった。だが、もし——意味などなかったとしても——彼が叫んだとしたら、それはおそらく、こうだったろう。

本作「クヴァドラトゥリン」は松籟社刊行の書籍『瞳孔の中』
(上田洋子・秋草俊一郎訳)に収載されています。

松籟社編集部

●訳者紹介●

秋草俊一郎（あきくさ・しゅんいちろう）

東京大学大学院人文社会系研究科修了。専攻は比較文学、ロシア文学など。
現在、ハーヴァード大学客員研究員。

著書に『ナボコフ 訳すのは「私」——自己翻訳がひらくテキスト』（東京
大学出版会）。共訳書にウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ全短篇』（作品社）、
デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か？』（国書刊行会）、クルジジャ
ノフスキイ『瞳孔の中』（松籟社）がある。

クヴァドラトゥリン [電子書籍版]

2013年9月16日 発行

著者 シギズムンド・クルジジャノフスキイ
訳者 秋草俊一郎
発行者 相坂 一

発行所 松籟社（しょうらいしゃ）
〒612-0801 京都市伏見区深草正覚町 1-34
電話 075-531-2878 振替 01040-3-13030
url <http://shoraisha.com/>

COMING
SOON

未来の回想

シギズムンド・クルジジャンノフスキイ

秋草俊一郎 [訳]

2013年10月15日発行

定価【本体1,300円+税】

四六判・ソフトカバー・144頁

ISBN: 978-4-87984-319-7 C0097 ¥1300

発行・発売：株式会社松籟社

(全国書店・オンライン書店・版元ドットコム・松籟社サイトにて販売)

近年、世界が「再発見」した異能の作家クルジジャンノフスキイ。
その再評価のきっかけとなった名作、待望の邦訳。

時間にとり憑かれた男、マクシミリアン・シュテレルは自分の生涯を「時間切断機」ことタイム・マシンの制作にささげる。折しも時は激動の二〇世紀、戦争や革命がシュテレルと彼の「マシン」に襲いかかる。シュテレルはマシンを完成させ、未来へと脱出することができるのか――



瞳孔の中

クルジジャンノフスキイ作品集

シグズムンド・クルジジャンノフスキイ

上田洋子・秋草俊一郎 [訳]

2012年7月31日発行

定価【本体 1,600円＋税】

四六判・ソフトカバー・218頁

ISBN: 978-4-87984-310-4 C0097 ¥1600

発行・発売：株式会社松籟社

(全国書店・オンライン書店・版元ドットコム・松籟社サイトで販売中)

脳内実験から小説へ—— クルジジャンノフスキイの奇想の世界

日常的現実のひとこまから奇想の世界が現出する。リアルかつ奇妙なイメージに快く翻弄されるうち、存在論的・認識論的な問題にまで思考は駆動されるだろう。近年、世界が「再発見」した異能の作家の短篇集。

【収録作品】

クヴァドラトゥリン / しおり / 瞳孔の中 /
支線 / 噛めない肘